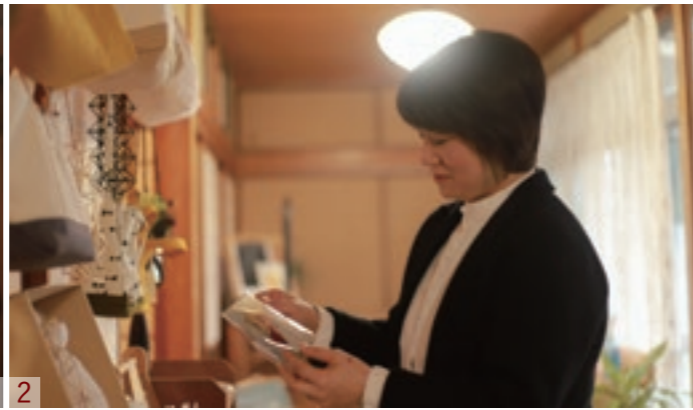


特集 サードプレイス

— 自分らしくいられる場所 —

家庭でもなく職場でもないインフォーマルな場所、サードプレイス。私たちにとって心安らぐ場所はどこだろう。



1_Branch Lesson で談笑する子ども／
2_ 講師手作りの販売商品を並べる中村幸枝さん／3_ウクレレレッスンの様子。レッスンでは笑顔が絶えない／4_ 2人で心を合わせてトーンチャイムを演奏／5_ レッスン中に難しいところを確認



市民の憩いの場

「たい」って原点に戻ります。特に子育て中のお母さん、シニア世代の人などが気軽に来れて、集える場所になればと思います。中村さんの目は明日を見据えた。

クシヨップなども開催される。

横河原ぶらっとHOME M E利用者協議会代表 藤岡慶太さんは、「今年は、地域のつながりが希薄になっている子どもたちの居場所づくりのために施設の休館日を利用した放課後こどもひろばを計画していました。コロナ禍で予定回数よりも少ない実施になってしまったけれど、今回できなかつたことを来年につなげたい」と話した。「平日昼間は高齢者の利用が多いです。SNSの発信が届いて、夕方に勉強する高校生や大学生の利用が増えてきました。時間帯ごとに利用者層が違ふ点を考慮して運営のあり方を考え

横河原ぶらっとHOME M Eは「主体性を活かしたまちづくりのサードプレイス」をコンセプトに住民と行政が連携して運営する多世代交流施設だ。開館時間は10時から18時まで。誰でも気軽に立ち寄れるフリースペースとして子どもから高齢者まで幅広い世代に利用されている。また、子ども向けのイベントやワー

音楽を通して居場所をつくる

中村幸枝さんが営む「Branch Lesson おんがく・まなび・あそび」はトーンチャイムやウクレレ、ピアノなどの音楽教室、手作り品の販売、レンタルスペースの貸出をしたりと幅広い。毎週水曜日にはフリースペースとして開放している。「気軽な人間関係を作れる場であってほしい。レッスンは、互いに認め合って、自分の居場所として感じてもらえればと思います」と中村さんは話

2年ほど前に横河原に移転開業してから居場所を求める人たちに答えるよう、レッスン、講座を増やしてきた。ニーズに答える喜びを感じる中、葛藤を抱える。「来てくれる人が本当に満足するものはないだろうと考えます。そのときは『地域の中で子どもも大人も会話を通して学べる場を作ってい



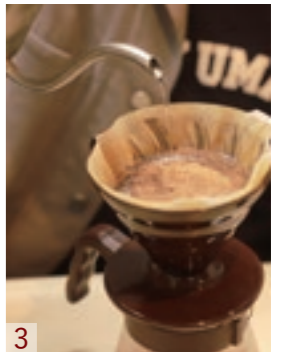
来館者の過ごし方はさまざま



横河原ぶらっと HOME で本を読む



1_ パソコンを持ち込むことができる／2_ 利用者協議会代表の藤岡慶太さん／3_ 飲食が提供される日もある／4_ 現在、毎週木曜日に18時から22時までフリースペースとして開館



人から人へ つながる輪

ていけたらと思う」。藤岡さんは横河原ぶらっとHOMEのこれからを見据える。多世代の人が誰でも気軽に立ち寄れる「地域の家」、新しい交流やアイデアを生み、広げていく地域活性化の拠点として横河原ぶらっとHOMEは進化し続ける。

金曜日にはさまざまな教室が開かれる。スタッフの土井敬子さんは「誰もが気軽に足を運べる場所にしたいです。私は喫茶コーナーが大好き。教室で仲良くなった人たちが、普段のちよつとした出来事などを話されています。話す内容は何でもいいんです。気持ちを吐き出すことができる関係性を喫茶コーナーで築いているようです」と話す。

サードプレイスふれあいは社会福祉協議会の事業として、川内健康センターの2階に昨年開館したばかりだ。来館者が自由に出入りできる喫茶コーナー、福祉事業所の作品販売、さらに月曜日から



5_ 教え合いながら作品を制作／6_ 活動中の会話が弾む／7_ 筋トレ・ストレッチ教室での一コマ／8_ サードプレイスふれあいの土井敬子さん／9_ 笑顔で話せる時間はかけがえのないもの

ここに通う人は「気兼ねなく来れる私の居場所です。少し大変そうな人がいれば、男性でも女性でも関係なく声をかけます。みんなの心がリラックスできる場所です」と話す。

サードプレイスふれあいは始まったばかり。よりたくさんの方が使えるような場のあり方を模索する。

ひとりでも何かに没頭する時間はもちろん大切だ。しかし、人々が集い新しいものが生まれるとき、心が動く。その瞬間を味わえる場所こそ、サードプレイスなのかもしれない。